

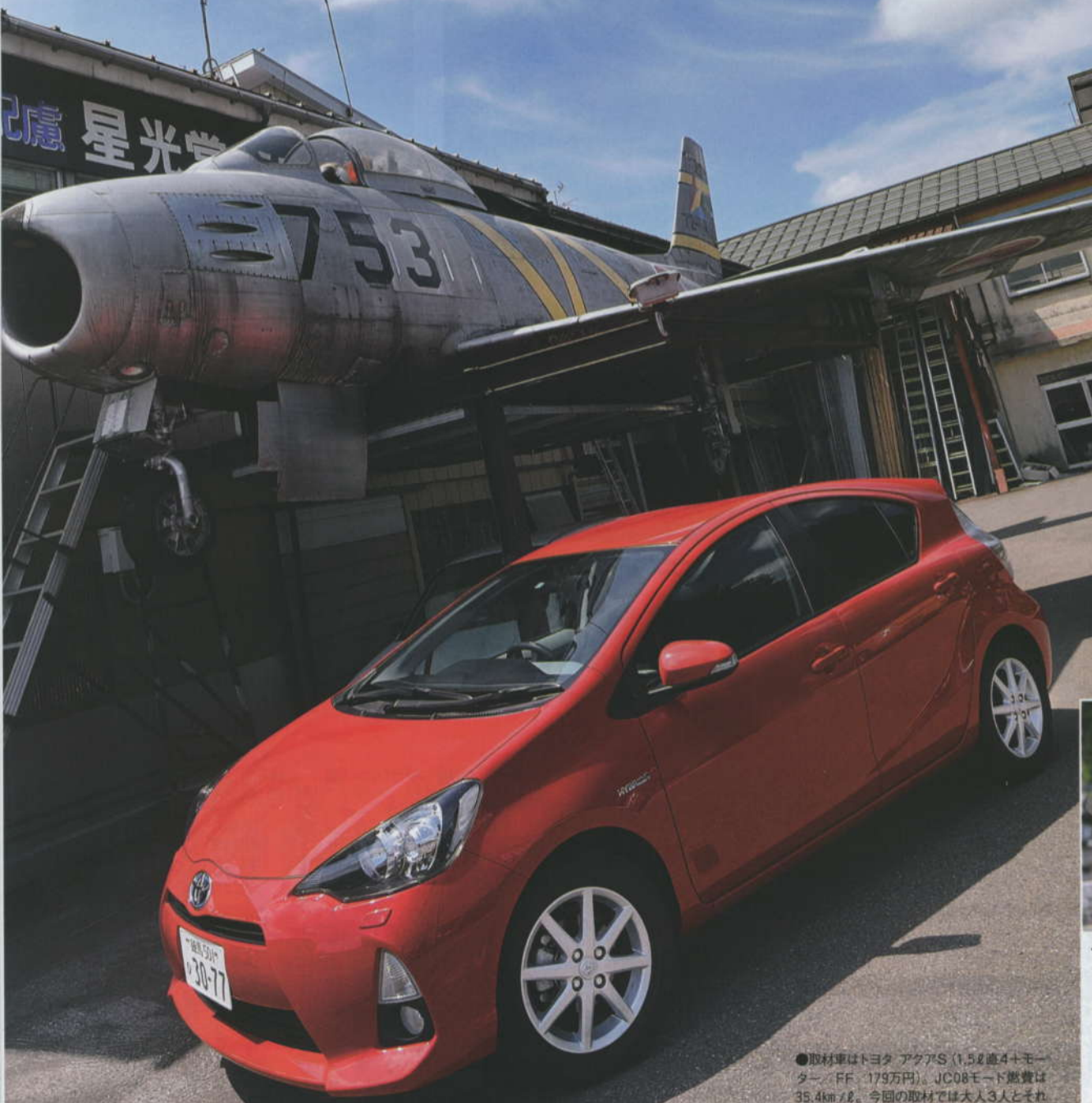
# ニコニコドライブ

～アンチ高速道路の旅～



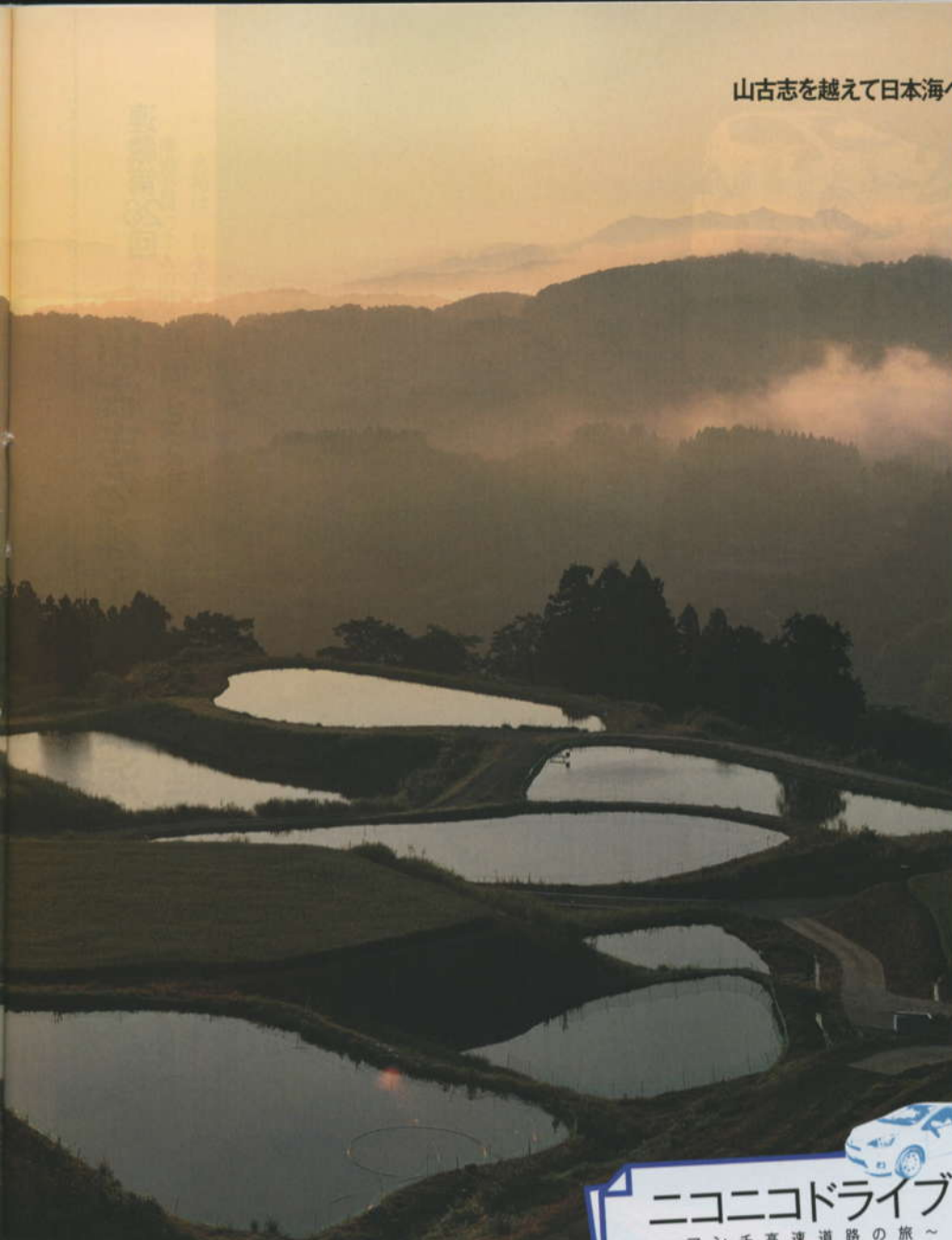
国道352号を前回とは逆方向へ進むべく、  
再び訪れた新潟県の小出で戦闘機に遭遇、その正体は。

文=下野康史 text by Yasushi Kabata 写真=岡 拓 Hiroshi Oka



**下野康史** 1955年東京生まれ。自動車専門誌の編集部員を経て1988年からフリーの自動車ジャーナリストに。近著に「21世紀自動車大事典(二玄社)」などがある。良寛さんの像と、出雲崎にて。

●取材車はトヨタ アクアS (1.5ℓ直4+モーター、FF、179万円)。JC08モード燃費は35.4km/ℓ。今回の取材では大人3人とそれぞれ1泊分の荷物、撮影機材を積んで197km走り、実走燃費15.8km/ℓだった



●これこそがホンモノの“コックピット”。ゆるいクルマの運転席のことを、かっこつけてコックピットなんて呼ぶのはやめてもらいたい



●越後広瀬駅で見かけた細かすぎる海拔表示。ちなみに、この駅は映画「男はつらいよ 奮闘篇(1971年)」のロケ地として使われた



●道光高原そば「いたや」のもりそばは650円。この後運ばれてきた大盛り200円分もかなりの量があり、そばだけで満腹になった



●店頭に並んでいるクルマのなかで、ひとときわ難いて見えたサニートラック。オーナーに大切に扱われてきたのだろう

## ニコニコドライブ

～アンチ高速道路の旅～

# る山古志の夜明け

### 心やさしいメカ好きの集う小出

今回のスタート地点は、先月と同じ新潟県の小出である。前回は国道352号を福島県側に東進し、秘境、奥只見の通行止め箇所までさかのぼった。今度は同じ352号の反対方向、小出以北を走ってみた。目指すは日本海だ。

関越道・小出ICから国道17号(東京→新潟)へおると、アクアの後席で岡カメラマンが「なんだ、あれ!」と叫んだ。道端にジェット戦闘機があったという。なわけないだろうと思いつつ戻ってみると、町工場の駐車場にF86がいた。鉄骨のやぐらの上にシルバの機体を載せ、下にはスズキアルトが止まっている。ものすごい駐車場の屋根だ。

工場の人に話を聞きにいくと、こころよくやぐらの上まで案内してくれて、コックピットにも座らせてもらう。先月のニコドラでも通った大湯温泉に長く展示されていた航空自衛隊機を買い取って、15年前からここに飾っている。以来、小出のランドマークになっているらしい。1950～60年代に活躍した戦闘機のコックピットは驚くほど狭かった。

小出の「本町」交差点からニコドラを始める。町を抜けると、まわりには魚沼産コシヒカリの田んぼが広がる。数km走ったか、今度は助手席の編集部S君が「あっ!」と小声で叫んだ。道端にビカピカのサニートラックがいたという。なわけないだろうと思いつつ戻ってみると、田んぼのなかのカーディーラーに黒く光るサニトラがいた。店の人が15万円ですり出しているクルマだった。

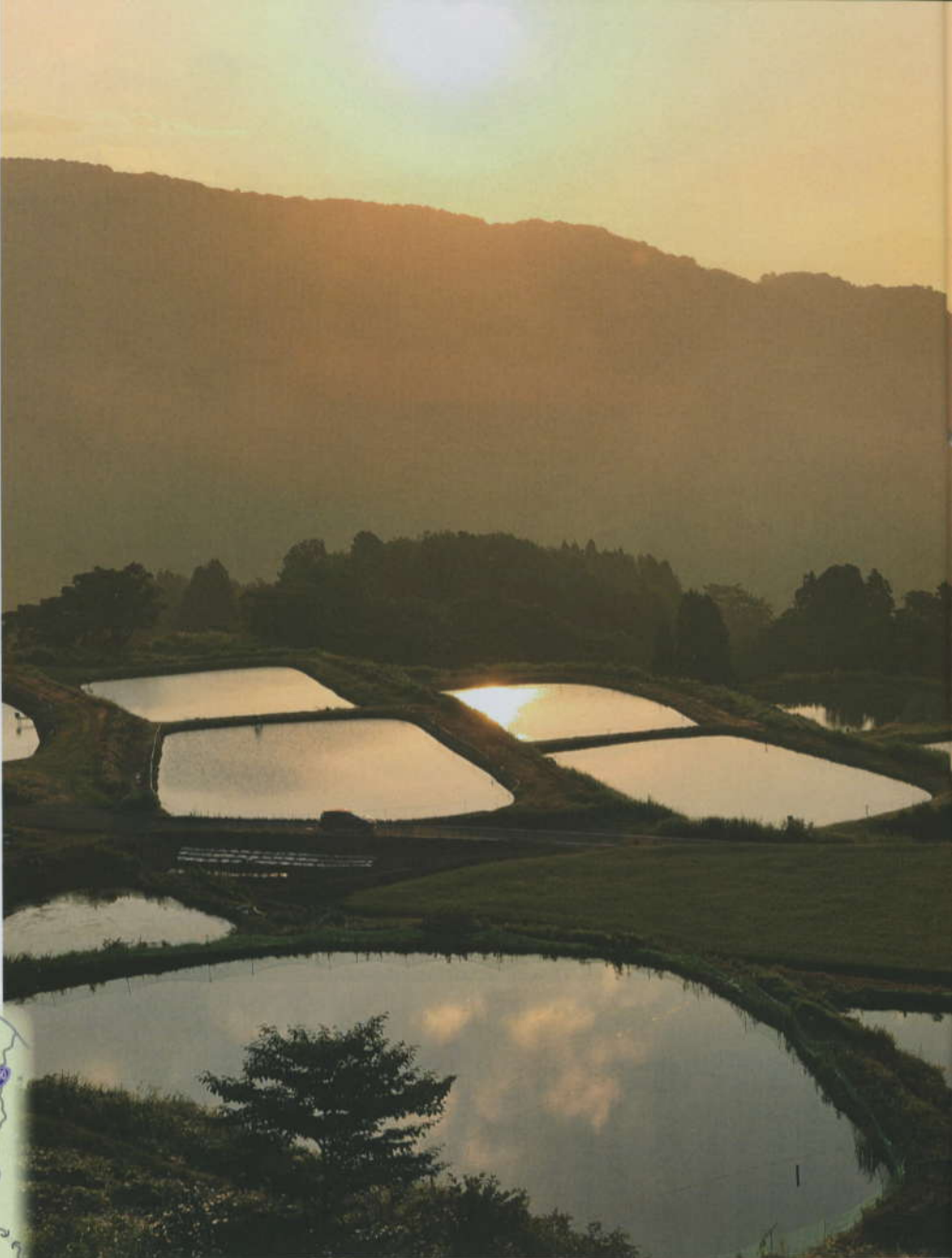
ツナギ姿の若いオーナーが出てきて、こころよく応対してくれた。突然訪ねたのに、向こうがなにか恐縮している。通りがかりの客と思われたからだ。電話で商談中の長岡の人にほとんど決まりかけているのだという。名機A12エンジンの音を聞かせてもらった。雪国、小出の人たちはウエルカムでオープンマインドだ。



●2011年に完成したばかりの広神ダム。ダムカードは土日祝日年末年始を除く8:30~17:00に管理事務所で配布される



●中山隧道。電灯が少ないので、懐中電灯を持っていったほうがいい。国道291号中山トンネルの小松倉側に無料駐車場とトイレあり



# 朝靄の立ちこめ

352号は山のなかで行き止まる

東京を7時過ぎに出てきたのに、もうお昼である。越後は遠い。サニトラの店から数km行き、県道を少し入ったところにある「いたや」というそば屋に入る。田園のなかに建つ木造の大きな店だが、駐車場も店内も込んでいた。官接待ふうのグループが多い。

だいぶ待たされたが、たのんだ大もりがドンと出てきた。越後名物のへぎそばで、布海苔が練り込んである。もちっとした食感で、食べ応えがある。よく冷えたそばつゆもおいしい。うまいうまいとズルズルやっていたら、新潟美人のおねえさんがどんぶりに盛ったそばを持ってきた。間違えて普通のもりを出してしまつてすいませんと言う。しかも200円増しの大もりでも850円だ。そばを芸術品みたいにもつたつけて出す昨今のそば屋に教えた店である。おいしいそばでおなかいっぱいになって、再び走り出す。

JR只見線の越後広瀬駅を過ぎると、国道は真北に針路を変え、次第に山のなかに入つてゆく。たまにある人家は、袴を履いたような独特のかたちをしている。1階部分がコンクリートの車庫で、その上に重厚な杉板の総二階屋がのっている。大抵どの家にもある物置の屋根はかまぼこ型だ。いずれも冬の豪雪を考えたつくりである。

8月の下旬、成田空港は込んでいるらしいが、この辺はまずクルマにも人にもすれ違わない。そのくせ道路は広く、恐ろしく立派なトンネルや覆道をくぐる。

去年できたばかりの広神ダムを過ぎてほどなく「長岡市山古志」の看板が現れて、魚沼市から長岡市へ入る。さらに進むと、繁茂する夏草で狭くなった舗装路が突然、ダートに変つた。小出を出てから20km、352号はここ山古志で一旦途切れる。萱峠を挟んで約5kmの未通区間である。いわゆる点線国道だ。近くの路肩には「この先に萱峠トンネル完成予定」と書かれたイラスト入りの大きな



●国道352号山古志側の行き止まり地点。萱仲トンネル建設予定地の看板が立てられていたが、工事が進められている気配はなかった



●山古志のあちこちで3段重ねの消火栓を見かけた。冬期には下の2段は雪に埋もれてしまうということなのか



看板があったが、開通の見込みは立っていない。  
352号は栃木県上三川町から新潟県相模市まで、330kmを超す長い3ヶ国国道である。しかし、福島・新潟県境から奥只見にかけての山岳部分は、雪のために半年以上にかたて冬期閉鎖される。雪が消えてからも、その一帯は土砂崩れや水害や土砂災害の果だかと思つと、こちら側には忘れ去られたような未通区間がある。踏んだり蹴つたりのワケあり国道である。

**錦鯉と闘牛の里でトンネル探検**

山古志地区は、東西に長い新潟県のほぼ真ん中であつて、これぞ日本の山里、と誇りたくなるような美しいところである。「いにしへの志」なんて、名前もいい。錦鯉発祥の地として知られ、養鯉場が数多くある。牛の角突きと呼ばれる闘牛も、いにしへの昔か



**山古志闘牛場**

●今は無人だが闘牛が行われるときには、どよめく歓声に包まれるのだろう。この場所も中越地震の被害を受けて、2009年に改修されたそうで、観客席の天井には被災者への激励の言葉が刻まれていた。今年の闘牛は9月22日(祝)、10月8日(日)、21日(日)、11月3日(祝)に開催される予定。入場料は中学生以上2000円。保護者同伴の小学生以下は無料

ら盛んだ。面積は東京の江東区とほぼ同じ。現在そこに476世帯、12000人あまりが暮らしている。  
しかし、町村合併前の山古志村を全国区で有名にしたのは、2004年10月23日の中越地震である。村役場にあつた地震計を壊し、震度の記録を残さなかつたほどの強い揺れで、村は甚大な被害を被つた。山古志地区の標高はそれほど高くない。いちばん高い山でも600m台だ。そのかわり、上つたり下りたりの起伏が激しい。だから景色がきれいといふこともあるのだが、地震で大きな自然災害が発生したのは、この地形のせいもあるのかなと、素人考えで思った。  
山古志闘牛場を訪ねる。しかし、開催日ではないため、ひとつこひとりいなかった。せめて牛だけでもと思ひ、谷を下りたところにある見学用の牛舎へ行つた。闘牛だけあつて、デカイ。体重は1トンを超す。重すぎて立つ

「二前田」は山古志に数軒ある農家民宿のひとつである。かつて家の前に田んぼが2枚あったのが屋号の由来。話好きのおとうさんとおかあさんから村の話をつぶりに聞く。

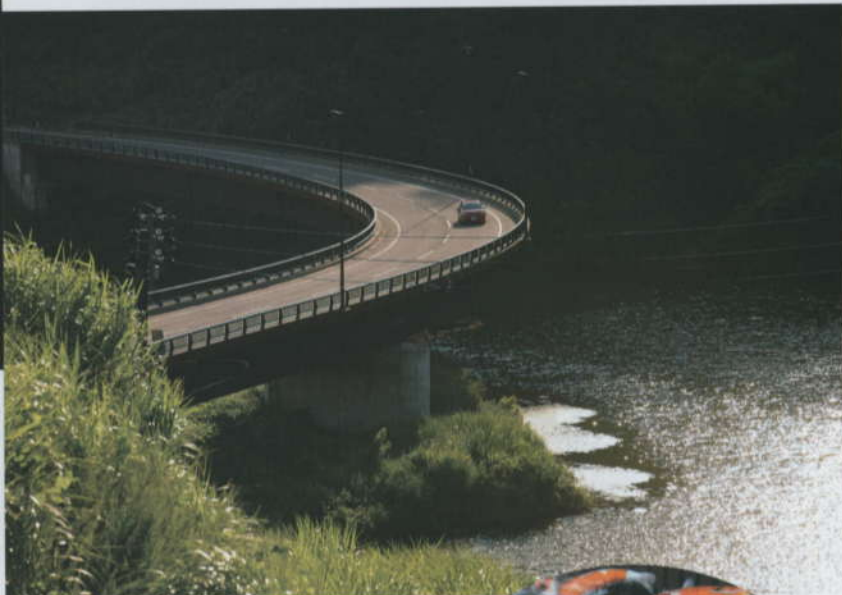
**早起きして山古志の絶景を望む**

900mの肝だめしが終わりに近づくと、出口にボーっと人影が浮かんでいた。アクアで先まわりしていたS君だった。

暗いので狭く感じたが、幅は2mある。かつてはクルマも通ったという。開通してまもなくの昔、小出から乗ったタクシードこのトンネルを通ったという話を、あとで御本人から聞いた。その晩泊った農家民宿「二前田」のおかあさんだ。最初、タクシードの運転手はいやがったが、事情を話して頼み込んだ。若き日のおかあさんはその日、六日町から山古志村にお嫁に来たのである。

暗いので狭く感じたが、幅は2mある。かつてはクルマも通ったという。開通してまもなくの昔、小出から乗ったタクシードこのトンネルを通ったという話を、あとで御本人から聞いた。その晩泊った農家民宿「二前田」のおかあさんだ。最初、タクシードの運転手はいやがったが、事情を話して頼み込んだ。若き日のおかあさんはその日、六日町から山古志村にお嫁に来たのである。

ているのがシンドイのか、ほとんどみんなおなかをつけて座っている。相撲部屋で大儀そうにあぐらをかいている力士を連想した。村の南端には国道291号が走っている。352号より南側を西進して小千谷へ抜ける道だ。その沿線に日本一長い手掘りのトンネルがあると聞いて、見に行く。てつきり国道が現役で使っているトンネルかと思ったら、877mの中山隧道は狭い入道トンネルだった。16年にわたる村人のツルハシで貫通したのは昭和24(1949)年。今は隣に立派な国道のトンネルがあるが、こちらも山古志の観光資源として保存されていて、だれでも通れる。



(上) 中越地震の土砂崩れで天然のダムができ、人家が水没するなどの被害がでた箇所。国道291号は橋が掛けられて復旧したが、人家は取り残されたままだった。(右) 山古志支所(役所)の池で見かけた錦鯉の美しさに感動したのだが、上等な鯉はもっとすごいのだという



# 米を作り 錦鯉を育て 牛を闘わす

地震のとき、おとうさんは食卓のある畳の間にいた。突然、ズドンと突き上げられて、2m飛ばされた。元いた場所には重いプラウ管のテレビが飛んでいた。外にいたおかあさんは、中国が爆弾を落とすと思ったそう。と、今は明るく語るふたりだが、この御夫婦も2年間の避難生活を経験している。翌朝、4時に起きて山古志自慢のサンライズビューを見に行く。アクアで山に上り、日の出を待つ。朝日が上り始めると、手鏡を並べたような棚池や、朝霧をかぶる山並みが赤く染まった。山古志の写真集が何冊も出版されているのもわかる。棚池とは、棚田を転用した鯉の養殖池だ。錦鯉は米作りのお金になるので、山古志では棚田より優勢だ。クルマが見えなくなるまで夫婦で見送ってくれた農家民宿をあとにして、長岡の町へ下りてゆく。県道を20kmほど走って、再び現れ



## 農家民宿二前田

●お世話になったご夫婦と。夕食に作っていただいた「ふっかつ」は、タレに漬け込んだ「ふ」を揚げてあり、中はしつとり外はサクサクの不思議な食感がおいしい。中越地震から1日も早く「復活」できるようにと願いを込めて地元で考案された料理だそう。1泊2食付きで一人6000円だった



た352号に出る。反対側の行き止まりも見えてみようとそこからさかのぼると、6kmほどで山に突き当たり、舗装が途切れた。山古志側と違って、開通の悲願を広報する看板はない。二前田のおとうさんが「都会からは来たがらないもの」と言っていたのを思い出す。長岡を都会と言ったのがおかしかったが、山古志から下りてゆくと、たしかに長岡は大都会だった。長岡駅近くの洋食屋で洋風カツ丼を食べる。今売り出し中のB級グルメだという。カツの上にあんかけのようなトロリとしたソースがのっている。それがすっぱいのでびつくりした。あまりに衝撃的すぎて、箸進まず。出雲崎で良寛さんに出会う

長岡を出て4km、信濃川を渡る。そのあたりからは平野が広がる。見渡す限りの青い田



## ニコニコドライブ

～アンチ高速道路の旅～



(右上) 長岡のご当地B級グルメ「洋風カツ丼」は見るとにボリュームたっぷり。提供する店は多数あり、「洋風カツ丼MAP」がインターネット上でも公開されている (左上) 北国街道妻入り会館。妻入りの建物の中がどうなっているのか見学できる。入館料は無料、建物の向かい側に駐車場あり (右下) 金魚やタコの形をした変わり種の紙風船は最寄りの道の駅「越後天領の里」で入手できる (左下) 国道352号はこの先柏崎へと続くが、日本海にぶつかるここで今回の旅を終えた



# 日本海を望む 出雲崎で旅を終えた

んぼが目にしみる。ときどき、小さな町というか、大きな集落を抜ける。道は空いているが、たまにスタンドやカーディーラーがある。路線バスも走っている。でも、早起きがたつて、眠い。

久しぶりに上り坂が始まったと思ったら、長いトンネルがあり、そのなかで長岡市から出雲崎町に入る。あとで調べると、それは中水トンネルで、旧道には小さな峠がある。トンネルを抜けてから5km、下りの左急カーブの向こうに青い水平線が見えた。一気に眠気がさめる。下においてゆくと、海沿いを走る国道8号(新潟→京都)に突き当たった。

山古志から50km。小出から素直に走れば70kmほどだが、アクアのトリップメーターは197kmを示していた。だれだこんなに走ったのは!? といえは自分なのだが、これだから下道ドライブはおもしろい。

出雲崎には妻入りの町並みという現役の街区がある。屋根の棟と直角な。妻の平面に出入口があり、しかもうなぎの寝床のように

長い木造家屋が通りに正対して並んでいる。出雲崎町の人口は4800人ほどだが、幕府の天領地だった江戸時代は、佐渡の金銀の荷揚げ港や北前船の寄港地として賑わい、2万人の人が暮らし、越後一の人口密度を誇ったという。特徴的な町並みできたのは、海辺の狭い土地に少しでも多くの家を建てようとした工夫である。

ここはまた、良寛の生誕地でもある。「良寛といえは？」と、少なくともほくより日本史にくわしいS君に質問すると、「子どもにやさしくしたお坊さん」と答えた。

でも、出雲崎で個人的にいちばん興味をひかれたのは、紙風船の生産量日本一というスベックである。国内の95%はこの町でつくられる。磯野紙風船製造所というすばらしく夢のある名前の会社があったので、訪ねたが、そこは問屋さんで、つくっているのは町のあちこちだという。

「ここは漁師町で、海が荒れる冬は仕事がないから、手内職で紙風船をつくるようになったんです」。そう教えてくれたのは、「妻入り会館」という観光資料館にいたボランティアガイドの石井さんだった。出雲崎の生き字引である。妻入りの家が再現された館内には、紙風船や良寛の木彫り像なども陳列されている。今の紙風船は、魚やタコやペンギンやの形をしていて、驚く。紙風船三兄弟みたいにつながつているものもある。

町並みを俯瞰で撮れるところはないか、石井さんに聞いた。探してみたが、なかなかみつからなかったのだ。すると、しばらく考えてから、「わかりました」といって、マイカーのカローラで案内してくれた。そんなつもりではなかったのに。そういえば、長身痩躯の石井さんは良寛さまに似ている。

最後は激坂を歩いて登り、日本海を借景に町が見下ろせる高台に着く。炎熱の日射しを受けてキラリと輝く夏の波が美しい。出雲崎を歌ったジエロの演歌を口ずさもうと思っただけ、知らなかった。